

★ 特集：煉瓦のマテリアルとしての魅力を再考する ★

# 120周年を迎えた 「赤煉瓦酒造工場」(重文)を訪ねて

日本れんが協会 技術顧問  
金子 祐正

大蔵省の醸造試験所第一工場(通称;赤煉瓦酒造工場)は本年で120周年を迎えた。赤煉瓦酒造工場(東京都北区滝野川2丁目)は、東京都文化財ウィークのイベントの一環として令和5年10月30日～11月2日に一般公開された。この機会に工場を訪ねたので工場の概要について述べる。

## 1. 醸造試験所の創立

明治時代の租税収入は主に地租(現固定資産税)であったが、明治の後半には酒税の比重が大きくなり国の税収の約36%(現在約2%)にも達した、当時の清酒醸造は経験に頼っていたため理論的に裏付けされた近代的な清酒製造技術の確立が求められていた。このため醸造技術を科学的に研究する醸造試験所を創立することになった。工場の敷地や設備など手島精一(東京工業学校長、現東工大)や若槻礼次郎(当時大蔵省書記官)らにより検討された結果、大蔵省は1904(明治37)年に試験所管制を公布して醸造試験所(現酒類総合研究所)を創立した。

## 2. 赤煉瓦酒造工場の概要

醸造試験所を正式に創立するに先立ち、赤煉瓦酒造工場は1903(明治36)年に我が国唯一の国立研究機関による酒造の試験工場として建てられた。洋風技法による不燃性の煉瓦造で地上1階(一部3階)、地下1階、建築面積810㎡、延床面積1539㎡、施工者は宮崎善吉。

### (1) 工場の敷地

大蔵省の印刷局王子抄紙部附属工場(現北区滝野川)の敷地の水質が良好で豊富なため工場の適地として同省所有の官有地約5000坪余を授受した。なお近くに明治6年に渋沢栄一が創立した王子製紙(株)があった。

### (2) 工場の設計者妻木頼黄

工場の基本設計は、醸造技術で最新鋭施設を誇るドイツのゲルマニア機械製作所、実施設計は妻木頼黄で明治の建築界をリードした辰野金吾(東京駅)、片山東熊(赤坂離宮)の3人組の一人であった。妻木は、1859(安政6)年幕臣旗本の長男として生まれ工部大学(現東京大学)卒業後ドイツに留学、帰国後は明治時代の官庁官舎建築の第一人者とし



写真1 赤煉瓦酒造工場



写真2 白色施釉煉瓦の旧窰室

て活躍し日本建築学会副会長を歴任した。赤煉瓦酒造工場は、四季醸造が可能で清酒の腐敗を根絶する酒造工場の建設を目指した。妻木は、ドイツのビール工場の建築と我が国既存の酒造工場の技術を組み合わせて設計した。一方1898(明治31)年に愛知県半田に丸三麦酒の醸造工場として赤煉瓦造のカプトビール工場(登録有形文化財)を建てた、煉瓦は岡田煉瓦製を使用した。その他主な建物は横浜埠頭倉庫(通称;横浜赤レンガ倉庫)や旧横浜銀行本店(現神奈川県立歴史博物館)などがある。